

●特集II「禅」を究める——異端だった禅宗が正統となるために創出した対話法のパターン（公案）。その巧妙な質問とレトリックの構造、戦略を考察する

禅の言説戦略

橋爪大三郎

中国で誕生した禅宗は、大乘諸宗の教理をふまえた独特な行法を編み出しながらも、明清代には退潮していった。一方、わが国に渡来した禅宗は、中世から近世にかけて、ぶ厚い文化的堆積を残している。

禅宗という、仏教内部の一運動について、簡潔な見取り図を与えることを、以下で試みよう。私は禅宗を、初期仏教のかた多様な展開をみせてきた、言説のあり方をめぐる仏教の戦略の、変異のひとつとして位置づけたい。その場合、座禅という身体的な実践と、覚りをめぐる言説との関係が、どのような配置になっているかを、主題としなければならぬ。本稿は、とりあえずのアイデアを、仮説にまとめたものである。本来なら、資料の裏付けをとってから議論すべき内容

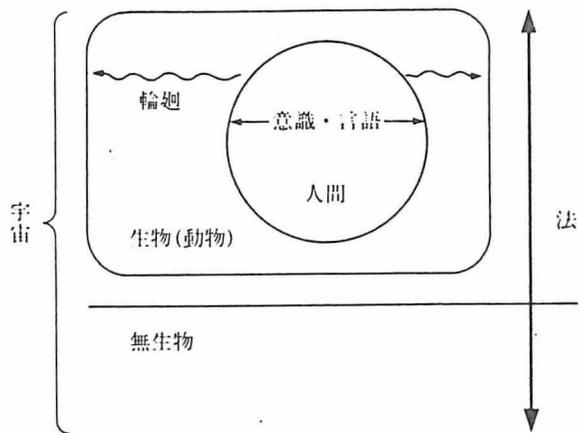
のものだが、今回は時間の制約もあり果たせなかった。いずれ、もう少し本格的な論考に改められれば、と思っている。

1 仏教の基本的構成

座禅は、もともとヨーガ、すなわち、インドのごくありふれた修行法だった。仏教も当然のように、これを採用した。

禅宗はこの座禅に、特別な意味づけを与える。天台、浄土など中国の宗派は、どういう経典や論書に依拠するかで分岐するのだが、禅宗だけは、修行法を核として成立している。

禅宗は、中国の正統仏教にたいする、異端として出発した。したがって、禅宗の主張を理解するには、当時の正統仏教の何たるか、中国社会の何たるかを押さえることが肝要だ。



まず仏教だが、その思想の骨組みは、つぎのようになっていられる。

(1)宇宙全体は、法(ダルマ…一種の因果律)に満たされ、それに合致して運行している。(宇宙は、無生物/生物/人間などを含む、いくつもの世界から成り立っている。われわれの世界は、この現世をはじめとする六道や天……からなる。)

(2)人間を含むすべての生物(動物)は、永遠に輪廻(死後ふたたび生まれ変わることを繰り返している。輪廻は善悪の因果律、つまり法に従う。

(3)人間は、はつきりした意識や言葉をそなえている点で、ふつうの動物と違う。人間は独自の、言説の流通圏をそなえている。ブッダの言葉も、そうした人間たちの間を伝達されていく。

〔(1)~(3)は、仏教に限らぬ、ヒンドゥー教一般の思想だ。〕

(4)ブッダの覚りは、法を認識・体得し尽くして、輪廻から解脱するという、特別の出来事である。法の内部の法の破れ(いわば特異点)が、解脱と言えよう。これは、ひとりの人間が宇宙の秩序と合一することで、極めて価値あることだ。

(5)覚りは、言説の流通圏を超える宇宙大の秩序と、直接に関わる。ゆえに、言説の側から、覚りそのものに接近するのは困難である。にもかかわらず覚りを人びとが信じるのは、ブッダの覚りを前提に語られる言説(経)が伝えられてくるからだ。

(6)ブッダの覚りを、特に価値あるものと考え人びとが、ブッダを「標本」として覚りをめざす出家者の運動(基本仏教)を開始した。彼らの集団がサンガ(僧伽)であり、経を伝持し、戒律に従う。

(7)サンガ外の在家の人びとが、基本仏教を前提に、新しい修行の方法(菩薩道)を開始した。この運動が、大乘教であ

る。大乘教は、ブツダの身体を、仏塔、経巻、現在他仏、……などと定義（解釈）しなすことで、可能になっている。〔4〕〔7〕は、仏教に独自の展開である。〕

前著「仏教の言説戦略」（勁草書房）では、ここ（インド初期大乘仏教の成立）までを問題にした。中国の仏教は、また違った展開をたどっている。禅宗との関連で、大事なポイントをまとめてみると、

(8)ブツダの言説と信じられる、多様な経典が堆積したために、テキストの取捨選択（教相判釈）が不可欠になる。選択の違いによって、各宗派が成立する。

(9)テキストの選択は恣意的なので、特定のテキストによらず、身体技法（座禅）を通じてブツダと同じ覚りをえられるという、主張の余地も生ずる。これが、禅宗である。

ところで覚りは、身体と宇宙とを等置する、特異な変換関係になっている。

ここで宇宙とは、現象の全体のこと。そのなかのごく局部的な現象として、私（の心）がある。私（の心）が覚りによって、宇宙（の法則）と一体になるためには、両者のあいだに「位相同相写像」が成立しなければならぬ。

部分と全体とを等置しようとすると、カントールの無限集合論と同じ構成になる。そこでは、経験的世界の大小関係の

ような相対的性質は消滅し、私（の心）＝極微の世界がそのまま、宇宙であると観ぜられる。小乗の覚りも、大乘の覚りも、禅の覚りも、このような構成をもっている点はいっしょである。

2 中国仏教の内包する矛盾

覚りを、万人が追求すべき至高の価値と考える仏教は、中国社会の伝統と、正面から衝突せざるをえない。

一口で言うなら、中国人の現実主義的な態度と、仏教の形而上学的な態度との衝突である。儒教が名実ともに中国の正統思想の地位を確立するのは、ようやく宋代以降だが、それ以前から、その根強い下地があった。

仏教から言えば、覚りは欲望を断絶することの果てにあり、欲望の最たるものは、性欲である。ゆえに仏教は女犯戒をもうけ、出家してサンガを構成した。しかし、中国社会の価値規準によれば、親を捨て祖先の祭祀を放棄する出家などは、不孝の極み、反社会的行動以外のなにもでもない。また、インドと違って輪廻の観念を欠く中国では、覚りが至上のものだと信じられにくい。

南北朝期、北方民族が立てた諸王朝が、仏教を「国教」化したのは、中国の正統思想である儒教を、中和・弱化しようと意図したものだらう。実際、西域に伝播した仏教は、当時の先進思想で、合理性・世界性を兼ねそなえていた。

しかし仏教も、中国では変容を被らざるをえない。最も根本的なのは、インドで承認されていた出家修行者の世俗的な地位を、ついに認められることがなく、政治権力の下、世俗社会の内部に置かれたことである。すなわち、出家・得度や寺院の財政的基盤もすべて、政治的国家の管理下におかれたのである（国営仏教）。

こうした変化は、中国風に理解された大乘教の教理により、正当化された。すなわち、ボサツや化身（垂迹）の観念は、中国の社会慣行を、インドの基本仏教からの逸脱としてでなく、その体系的な変容だと理解（解釈）する余地を生じたし、また、サンガ（教団）の自律性がないことも、小乗の具足戒律をボサツ戒が止揚した結果と理解されたのである。

このように中国化したあとでも、仏教が儒教、道教と、正統思想の地位を争うのは至難である。しかも、寺院には免税の特典や優遇措置が認められたので、それを目当てに出家する者があつた。僧侶の質も低下し、国家財政も逼迫して、社会問題となった。数次にわたる反仏教運動（三武一宗の廃仏）は、だから一種の「行政改革」である。その観点から、寺院の整理、僧侶の還俗が行なわれた。

*

そのようなとき、異端として出発した禅宗が、やがて中国で正統の地位を確立してゆくのは、なぜか？

それはひとえに、禅宗が、仏教の正統な教義（の一部）を

否定し、それに替えて中国世俗社会の価値を肯定したからである。特に、①労働を肯定し、②経済的に自立し、③一代の修行で最高の覚りに達すると主張した点が重要である。

順に見ていこう。

まず、労働の肯定だが、もともと仏教では、僧侶の労働を禁止していた。たとえば比丘の二百五十戒のなかには、掘地戒というのがあつて、地面を掘る、すなわち農耕に従事することを許さない。ゆえに僧侶は、乞食生活に頼らざるをえない。無為徒食の僧侶を国家が養わなければならないのも、これが根拠になっていた。

中国の価値規準は、政治V労働V無為徒食、の順である。僧侶に政治は無理としても、せめて労働させよう。ちょうど人民解放軍みたいに、労働を義務づけてしまおう。そうして、人民大衆の信頼を獲得する。労働＝修行という論理が、禅宗の核になっている。

これと関連するが、第二に、寺院の独立採算制。農産物や加工食品の生産・販売。各種のイベントから金融にいたるまで、殺生戒に触れない程度のあらゆる事業を手がけ、経済的自立をはかる。人民に対するサーヴィスは、ボサツ道の実践なのだ。これが、政治勢力の交替に関係なく、中国社会の現実的な勢力として存続することにつながった。

第三に、座禅の修行によって、ブツダと同等の覚りに達するとした点。形のうえでは、小乗の阿羅漢果の考え方と似

ているみたいだが、それよりも、ボサツ↓ブツダの覚りのほうが数段高いという、大乘の教理をふまえている。その覚りに、一代で達するというのだから、老荘思想にも対抗できる。

3 禅宗の言説戦略

以上のような禅宗の主張は、それまでの仏教の常識からすると、突飛なものである。

これまで中国に伝わってきたテキストの体系の内部で、そういう主張はできない。また、都合のよい別ルートテキストが（たとえ偽経でも）容易に見えてくるわけでもない。すべてのテキストの源泉は、ブツダである。そこでブツダからテキストと別に、最高の覚りにいたる修行の技法（パフォーマンス）が伝承されてきた、と主張する作戦がとられることになった。そのスローガンが、「不立文字」である。

禅宗の祖とされる菩提達磨は、釈尊から数えて二十八代。インドから遠く南海を経て、中国に渡来し、大乘の座禅の奥義を伝えた。以下、慧可↓僧璨↓道信↓……と相承されて、禅宗が成立した（ことになっている）。

彼らが重んじたのが『楞伽経』。それによれば最晩年のブツダは、こう述べた。「私は覚りを開いてこのかた、口をきいたことがない。」つまり、本当に大事なことは言わなかった、という意味である。（それをこの経典で述べているところが、実は苦しい。）とにかくこれを根拠に、一切の経典

よりも、座禅を上位に置くという主張がなされる。

*

ところではっきり言えば、座禅なんか誰にだってできる。だから、座禅だけで宗派を形成するのは無謀である。問題は、座禅をすればブツダの覚りに至るのだという確信（ないし解釈）を、どうやって供給するか、だ。

そこでまず土台になるのが、天台や華嚴が踏まえている正統の大乘思想だ。大乘系の経典が、空観やボサツの階位、ブツダの覚りの優越性を唱えている。座禅をただの座禅でないといい張るためには、正統の解釈を流用する必要がある。ただし禅宗は、その同じ高所に、つづら折りの坂道を辿るような手間をかけず、一足飛びに到達するという。

その一方で禅宗は、僧侶の日常生活空間全体を、具足戒とはまた違った仕方で、確実なフォーマットに編成する。

禅林清規（禅宗の規則）のひとつ、たとえば「赴粥飯法」は、食事の作法をこと細かに定めたものである。曰く、食事中に声を出すな、落とした飯を拾うな、丸呑みにするな、舌をびちゃびちゃなめ回すな、……。禅宗の修行法は、あくまで日常的だ。僧侶は寺院で、社会生活を送る。独りで山中にこもり、断食や苦行の果てに、非日常的な能力を身につけるのではない。社会生活のただ中で、労働や食事のような日常的な行為に織りこまれて、座禅もある。いやむしろ、座禅とそれ以外の日常的な行為とを、区別すべきだと考えていない

のである。

*

しかし、行為の外形にばかりこだわらるなら、その修行法が仏道に合致しているということも、誰の修行がいちばん進んでいるかということも、決定できなくなってしまうだろう。

そこで「公案」という言説技術が、必要になる。

公案とは、確定した知識を伝達するものではない。単なる質問技法（対話法）のパターン（の申し伝え）である。多くの大乗経典が、比喻や過剰な分類によって大きな物語を構成していく戦略をとると対照的に、公案は、言語をそのミニマルな用法に濃縮還元する。

たとえば、短気で困ると訴える男に、禅師は「その短気をここにだしてみろ」と言う。もちろん出せるわけではない。「ありもしない短気を直す暇には、仏の心のままでいなされ。」このように巧妙な質問とレトリックの集積が、公案だ。というわけで、公案という形で伝承されている言説技術を詳しく分析してみるべきだが、ひとまず、つぎのような予想が成立すると思う。

日常の言語の意味は、意識されない多くの自明な前提（社会的文脈）に支えられている。日常言語学派以来の言語分析や、言語行為論が明らかにした通りだ。その前提を、あえてとり外してしまう（たとえば、抽象名詞⇨短気を具体的事物のように扱う）と、そこに不可解な抽象空間が出現する。だる

う。もちろん、聞き手をその世界に巻き込むためには、禅師の肉体的な迫力が必要なのだが、いったん巻き込まれてしまうと、それが日常を離脱する度合いが、ちょうど座禅の際に意識が現前する世界を離脱する度合いに等しい、と思われてくる。つまり公案の体験は、座禅の到達する高い境地を想像させるに十分なのだ。

公案の言説技術は、日常言語ばかりでなく、伝統的な大乘の教義も破壊できる。中国の他宗派はかならずあるテキスト（経論）を根拠にしているはずだが、そのテキストにも、それを妥当ならしめる文脈（暗黙の前提）がある。僧たちの信は結局、そうした文脈に依存せざるをえない。そこを同様に衝けばよい。そうやって、経典の字義どおりの言説を上回るパフォーマンスがありうることを、主張するのだ。

*

禅宗を、このような戦略（信のミニマリズム）と理解できるとすると、それは、ブツダの時代の、仏教の最初の動機を復興するとも言える。しかし別の角度から見れば、中国的な逸脱でもある。その実像を、具体的な資料にあたって検証し、禅宗の言説戦略として記述すること。それが、わが国の文化的堆積を還元するうえでも、重要かつ不可欠な作業のはずである。